

浄土

二月号

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特）承認雜誌（第三五二号）
昭和四十二年一月二十五日印刷 昭和四十二年二月一日発行

第三十三卷

第一号



題 づ ば き

法然上人鑽仰会

衞心之中
有衣食



恭順



道心之中

有衣食

清水谷恭順

(浅草寺貫主)

これは、私の座右の銘です。

伝教大師の「一心戒文」の

中にある言葉で、これにつ

づいて、「衣食之中、無道

心」と言われています。

心すべきよい言葉です。



わが身の宿善をよろこぶべし

法然上人 御法語

— 目 次 —

表紙「つばき」松濤達文画

涅槃	松 濤 誠 廉	(2)
名士訪問 清水谷恭順僧正		(6)
新興教団探訪(1) 真如苑	藤 井 正 雄	(10)
お茶をおいしく 上手な玉露の入れ方	三 浦 純 亭	(14)
浄土宗のおしえ 四修について	大 谷 旭 雄	(16)
元 和 偃 武	鶴 田 湛 泉	(23)
昨 夜 の 夢	長 谷 川 実 樟	(31)
ご法語をいただく		(5)
新刊紹介 この子らに愛の手		(9)
仏教の常識		(19)
高僧夜話		(20)
読者の声		(26)
連 誌 読 話 みんなの法然さま七ヶ条制誡のこと	高 橋 良 和	(28)

涅槃

槃

松 濤 誠 廉

(立正大学教授・文博)



釈尊が沙羅双樹の下で涅槃された時、天地自然界、生とし生けるもの皆な悲しんだ。御弟子の中でもまだ覚らない人達は泣き悲しみ、覺った方々も無常の理を觀じてようやく悲しみにたえたのである。動物さえ悲しみに沈んだと伝えられている。五十年間説法された三界の導師を失ったのである。彼等の悲嘆は当然のことと領けるのである。

然し当時の出家道の人生觀に於いては、涅槃は理想であった。生の世界が苦であるのに対して涅槃は最高の安樂であり、無始以来の輪廻転生の過程から完全解脱への卒業でもあったのである。従つて当時の宗教界は皆な涅槃をその修行目的としたのであった。この理想を御自分から始めて得られた釈尊に般涅槃のお慶びを申しあげる者は一人も居なかつたの

であらうか。沙羅双樹は時ならぬ花をつけ、天からは花の雨が降ったとも伝えられている。これを釈尊のためにお慶び申上げた姿だと理解出来ないであらうか。

涅槃は梵語では、誰も知っている様に、ニルバーナ、釈尊當時の通用語ではニッバーナであつたろう。これが発音のまま漢語化されたのが涅槃である。意識では滅とか円寂とか訳される、般涅槃とも云うが、その梵語はバリニルバーナ、完全な涅槃の意味である。煩惱が付き、業果の残りもなく、身体も完全に消滅してしまつて、悪魔も捕らえることの出来るような残りのない完全な消滅とされている。

涅槃の思想はインドの他の宗教哲学では殆んど發達しなかつた。仏教の姉妹教であるジャイナ教では不滅の「我」の思

想が定着してから、涅槃は不滅の我が一切の業縛から自由になつて、世界の最高所にある解脱界に於いて本来自己の我に具備する諸徳をたのしむ意味に変わっただけである。

これに反して仏教の涅槃については色々の発展のあとが見える。

その第一は有余涅槃である。煩惱が総て尽きても身体の残っている間は涅槃とは呼ばなかった、身体そのものから来る苦があるからである。仏教ではこの身体が残っている状態をも認めて涅槃としたが、完全な涅槃と区別する為めに有余涅槃と名付けたのである。この有余涅槃の思想は、釈尊が御自分から説かれたのか、釈尊以後の発展かは判断しがたいが、釈尊の思想的態度に原因することは否定することは出来ない。釈尊は精神の面を自ら重視された、解脱の為めの身体の力を尊重された。また釈尊は現実主義で、現実に立ち、現在ある力を解脱の為め活用せしめられた。これ等の釈尊の態度は、種々な釈尊の行動の中に現れているが、これ等の態度が涅槃の考え方にも現れた結果、有余涅槃を認め、これを重視するようになったものと考えられる。有余涅槃者にして始めて解脱者として活動が可能なのである。また大乘の教える十方の諸仏、皆有余涅槃者でないものはないのである。有余涅槃の仏を立てることによって、仏教らしい仏が出来たわけ

である。そのみならず、菩提樹下開悟から沙羅涅槃までの生きた釈尊はまた有余涅槃者であり、この仏が、最高の世界、世界宗教の開祖なのである。有余涅槃を軽んずることは出来ないのである。

次の思想は無住処涅槃である。前にのべた通り出家道の理想が涅槃であるので、出家がこの理想を得た時、よろこびの中にしたるのが当然であるが、仏教では、これを得てもこれに住せず、これに執着しないのを本当の解脱者と云うのである。これを「生死に執せず、涅槃に住せず」とも云う。涅槃に執するものは、涅槃に直ちに入つて衆生の救済を行ない、これが独覚で、仏教が二乗としてさげすんだものである。釈尊は有余涅槃を得てこれに執着しなかったから、迷妄の人の心状を明かに見ることが出来、その現実の上に立つて、對機說法することが出来たのである。出家道は解脱道であるが、釈尊は自己の体験に於いて解脱を一層深く一層純粹にしたのである。この故に仏教では「たとえ善なりとも執あれば善にあらず」の態度が種々の面に現れているのである。最後は涅槃の思想である。仏教はその教学が進むにつれて、解脱者、解脱者の対象である物それ自体、更には一般人の心の本質、を絶対者とするようになった。この絶対者そのものの考え方も学派によって多少の異りがあるが、所謂相對に対して絶対

を立てる場合その両者からも超絶して、一方にはその両者をも自己の中に抱擁するもの、これが仏教の到達した最高の絶対者である。これを常楽我淨の語をもって現わすのである。

解脱者の入り住するところ、これもまた絶対者と考えた、これが涅槃常住の思想である。涅槃は、仏の実体として法身、事物の実体としての真如法性、衆生心の実体としての如来藏等と同体の絶対者となったのである。

仏教に於いて涅槃はどうしてこの様に發展したのであろうか。この答は、仏教は何故立派に發展して最高の世界の宗教となったかの問に対するものと同じである。釈尊につゞく代々の仏教の指導者の努力に依るものに相違ないが、その基礎は釈尊自身の思想的態度にあったのである。また釈尊の解脱の深さに起因するものである。

釈尊は解脱して解脱そのものからも解脱した眞実の解脱者となられたこと。

従って彼は現実を冷静に正しく見極めることが出来た。従って現実を尊重し、これを解脱を得るために利用し、解脱の中に活用することが出来たのである。こゝで云う現実とは、自他の心身とその関係するすべてである。

この外かに釈尊の個性に存在していたと考えられる人間愛

を加えて考えたなら、大乘發展の原因は残りたく理解出来るものと思う。

さて我々淨土教の信者にとって涅槃は如何なる意味を有するであろうか。

釈尊は（本述の考え方もあるが、過去仏として考えれば）無余涅槃された仏、西方の阿彌陀仏は有余涅槃の仏、吾々凡夫は仏力と三心具足の念仏によって、お淨土に生れ、其処での修業によって解脱を得、有余涅槃して完全解脱者となる心構である。吾々にとって無余涅槃は極樂往生の後にある理想である。

☆ ☆ ☆

吾々煩惱無底の凡夫は、理論的にどうのこうのといっても有余にしろ無余にしろ、涅槃の味は知るよしもないが、弥陀の御力を信じ、念仏三昧する時、浴し得る光明、この中に弥陀の有余涅槃の味があり、完全涅槃の芳香があるのではあからうか。

三千年前の二月十五日中印度クシナガラ城外のサラ双樹の下で般涅槃された釈迦牟尼仏を偶び、御供養する為めには、吾々にはお念仏があることを知るのである。

ご法語をいただく

わが身の宿善をよろこぶべし。かしこきも
いやしき、人おほしといへども、仏法を
信じ浄土をねがふものはまれ也。

(十二箇条問答)

一人のお弟子さんが、法然上人に向つて
「念仏の行者は、日常どのような心がけて暮
したらよいのでしょうか」

と質ねました。これに対して法然上人は、
世間の無常なこと、阿弥陀さまの本願のこと
人身のうけがたきこと等幾つかの心掛けにつ
いて懇切に説明し、そして最後にこのご法語
の通り、わが身の宿善を喜びながら暮すよう
にと仰せられました。

宿善というのは、現在までに積み重ねてき
た善根のことです。善根というのは、善い結
果をもたらしき善い原因のことです。現在
までというのは、この世に生をうけてから以
後のことばかりでなく、前世や前々世の古い
時代のことを含みます。前世の善根というこ
とは、両親の代の善根であり、前々世の善根

ということとは、両親の両親における代のそれ
をいいます。従つて宿善というのは、わが身
一代のことは勿論で、遠く幾世代にまで及ぶ
ことであります。

原因があるからこそ結果があるので、原因
のないところに結果がある筈がありません。
世間では正直者が馬鹿をみるといいますが、
正直という原因に他の原因が結びつくから、
こうした結果になるのであります。仏教は、
善い行いをなせば必ず善い報いがあることを
教えます。たとえ目の前に悪人が榮えている
ことを見たとしても、悪い行いをなせば必ず
悪い報いがあると信ずることが信仰なのであ
ります。

それなら善い行いとはどんなことでしょう
か。慈善や人助け、奉仕等も善行でしょう。
しかしもっと根本的にいえば第一に貧らぬこ
とであり、第二に怒らぬことであり、第三に
怠けぬことであります。貧る心は貧しい者よ
りも高める者の方が多く抱っています。怒る
心は不平不満から生ずるもので環境にめぐま
れている者がかえつて不平顔をしています。
また怠け心は、賤しい者の共通心理です。こ

うした心掛けは、他人を傷け自分を傷けて止
まるところがありません。

こうした三つを排除してゆくことが喜びで
あり、その行いが善行であります。

さてご法語は、高貴のものも賤しい者も、
そんなことにはかわり合いがなく、多くの
人々の間にあって、仏法を信じ往生浄土をね
がう人はごく少数であると仰せられています。
この少数の人々、即ちお念仏を教えなが
ら、心安く毎日暮している人々は、その人の
宿善がもたらしてくれた結果に外なりませ
ん。こうした意味でわが身の宿善を喜んで暮
してゆくようにするのであります。

さて、おかげ様で毎日を平穩無事に暮して
います。さして貧る心を持っていません。人
と争うような事件もありません。そして業務
に精を出し平和な月日を過しています。平凡
ながら不自由なく明るい生活を営んでいられ
るのは、わが身の宿善のおかげなのです。こ
のことを喜ばねばなりません。毎日の生活に
感謝と喜びとをもって暮さなければいけませ
ん。これが念仏行者なのです。

(村瀬秀雄)

名 士 訪 問

浅草寺貫主

清水谷恭順 僧正



漢文でしほられた

「私の父はなかなかの漢文通でしてね、子供の頃、随分しほられましたよ。四書五経や、文選まで教えられたものです。学校から帰ると、一時間、素読をやらないとめしを食わせてくれんですからね」

その話しっぷりは、静かであるが、重々しい。

「お父さんは、漢学者でも」

「いや、昔の坊さんは、漢文をよく読みましたよ。勉強と言えは漢文ですからね」

それでは、今の坊さんは駄目なのか。そこまで言われなかったが、子供の頃に受けた厳しい教育に比べれば、今の教育は駄目だなあと考えられているに違いない。

賑やかな仲見世通りからは、僅か入っただけの伝法院の一室であるが、別天地の様に静かである。

薄氷のはった池の上を、いろいろな鳥が、冬の空気を突くように鳴いている。

「時々、鴨なども四五羽飛んできますよ。休みに来るのでしょう」

そう言いながら、僧正は目を細めて、庭に目をやられた。七十七歳というが、以前お目にかかった時より、やや肥えられ、顔つやもとてもよい。無雑作に衣を着ておられるのであるが、いかにも身についている。江戸のシンボルともいえるべき浅草観音様の貫主にふさわしい壮嚴な風貌である。

大正大学をよくしなさい

僧正は群馬県にある天台宗、長昌寺の三男坊として生を受け、土地の小学校を出られた。それから母方の関係筋にあたる浅草山内の一寺に養子として引きとられ、天台宗中学から、更に大学へと進まれ、天台学を専攻された。

「天台宗大学は、今の駒込高校の所になりました。大正大学として総合されるまで

あったわけですね」

随分昔の話である。

「御宗門の椎尾辨匠先生や、矢吹慶禪先生には、宗教学を学んだものです。椎尾先生は大恩人でもあり、又親しくお付き合いしている一人でもあります」

浄土宗の碩学も、その頃は金仏教的存在であったことが分る。

「大正大学を創立する頃は、私も教授の一人として、努力したものです。沢柳学長を中心として、あの頃は、立派な、世界的な大学でした」

そう言われた時、今この大学に職を奉じている記者は、思わず息をのんだ。

「少くとも四宗派が協力している大学ですから、私達の努力を無にしないで、よい大学にして下さいよ」

この最後の言葉は、語気を強めて言われた。顔は笑っておられたが、記者にはズシンと響くものがあつた。

平凡な凡人

「何か生涯で思い出になったようなことはありませんか」

「いや、別にありませんね。平凡に生きてきました。人間が消極的だから、平凡な事しかできないんでしょうね」

しかし、この平凡なことがなかなか凡人には出来ないものである。「非凡なる凡人」そうした感懐が、記者の脳裏を走った。本当に平凡であつた為に、僧正は、今日の地位にあられるのである。特別な趣味もないという事である。

「しかし、なかなか暇がありませんね。自由な私の時間というものがないのですよ」
天下の浅草寺の貫主ともなれば、当然の事であらう。

「それでもいろいろ親しい人がいますからね。京都の曼珠院貫主の山口光円君は同年で親友です。東洋大学の教授をしている田辺重治先生などは、中学で英語を学んだ恩師ですがね、今でも親しくして頂いています」

その外、大野法道先生や、なくなられた石井教道先生などとも懇意であつた由。比叡山で教鞭をとっておられた関係であるらしい。

い。

「こうした人々は、その意味で天台宗にとつては、恩師ですよ」

旅がしたい

「旅がしたいですね。なかなか暇が無いが、できたら、京都や、奈良に行きたいね。何回行つても、よい所ですよ」

先生は、大正大学の教授でおられたが、二年間程比叡山中学の校長をやるため、坂本におられた。

「生徒と寝食と一緒にやる学校ですからね、二年ほど向うで生活しました。暇をみても京都の町をみて歩きました」

なにか、その頃を懐しがっておられる様子であつた。

「つい最近ではインド仏蹟を参拝し、セイロンに行つて、仏舍利を頂いてきました。この仏舍利は将来、五重の塔ができた時、おさめるものです」

「その外、何処か海外にでも」

「そうですね、シナに昭和十一年でした

か、行きました。天台山に巡礼したわけです。大森亮順貫主が団長でした。浄土宗の野口宗善財務部長も一緒でしたよ」

なんでも、蔣介石がなかなか天台山に登ることを許してくれず、須磨領事のはからいで、やっと登れたらしい。

「この頃じゃ、とても行けないね。あの頃でも、軍事的理由もあったのでしよう、登る事を好みませんでした。その翌年ですかね、日支事変が始まったのは」

シナ人の弟子

「随分お弟子さんもおありでしょう」

「そうですね。寺を持たせた弟子だけでも、七八人はいいますかね。シナ人で、釈仁光というのが、神戸にいますよ」

先生が昭和十七年から、十年間、長野の善光寺の大勧進職でおられた時代の弟子だということである。

「それがね、毎年、正月に来ては、一泊して帰るのですがね、去年は病気をしたとかで、来ませんでね。死なれでもしたら大

変だと思って、インドから帰ってすぐ、見舞に行つてやりました」

なんと、温情深い師匠であろうか。淡々と語られる話の中にも、そうしたものが溢れている。

日も暮れかかり、室内も薄暗くなつてきた。かもしにかけてある僧正の油絵だけが、美しく輝いていた。

「兄弟は皆長生きでね、姉など、八十六歳で、去年亡くなりました。群馬の生家は、兄の子がやっていますかね」

僧正が、浅草寺の貫主になられたのは、昭和二十七年であるから、もう十五年の歳月が流れたことになる。新しいよそおいをしたこの寺は、相変らず参詣者で一杯である。僧正の長寿を願つて辞去することにした。

「一つ写真をお願いします」

「さあどうぞ。こんな恰好でよければ」

と言って、自然な姿であつた。薄暗い中で何回かシャッターを切つたが、下手な記者の技術では所詮大失敗。出来上つたのはボンヤリした僧正の写真となり、誌面を飾ることができなかつた僧正にも申し訳けないことをして

しまった。

「残念でしたね。僧正の一人だけの写真はなかなかないのでね」

仲介の労を取られた堀入亮達大正大学助教授は、そういうながら、別な写真を、後で世話して下さつた。

「色紙でも一筆お願いしたいのですが」

「そくさと部屋に帰られた僧正が、

「いやあ。なかつたので一寸書いてきました。慌てたので印が曲つたね」

何もかもが自然そのものであつた。

「よい大学にして下さいよ」

またしても言われた僧正は、記者を玄関まで送られた。そして、記者が、門の角まできて、ふり返ると、未だ僧正は玄関に立つたまま、見送つておられた。記者は、もう一度、深く頭を下げて、路角をまがらねばならなかつた。

☆ ☆ ☆

浅草のネオンが伝法院の松越しに冬空にかがやき、日はもうとつぷりと暮れてしまつてた。

(安居香山)

この子らに愛の手を

重 障 児

△サア、これはバナナよVお母さんはバナナを自分の口のなかでこまかくかんで、かよちゃんに口に入れてやる。

かよちゃんはだきつくような姿勢でお母さんの口から移されたバナナを、つぎつぎのみこむ。一生懸命なんだろう。ひきつって曲がつたままの両手がかすかにふるえている。

そうやってひとときのバナナを完全にのみこむのに、二、三分はかかる。ときにははくじって、かよちゃんはノドをつまらせ、「エーエー」と苦しそうな顔をしかめる。△こめん、ごめん。もつとよくかみましようねVお母さんは、かよちゃんの背中をトントンと軽くたたいてやる。「ええすき」（のどがつまること）がおさまると、また同じ動作をくりか

えす。

バナナがすむと、こんどはチーズ。かよちゃんのきょうの朝食は午前十時から正午まで、たっぷり二時間はなかった。お母さんのヒタイには、うっすら汗がにじんでいた。

* *

これは、山陽新聞社編（学習研究社発行）の「重障児」とう本の一部である。そこには、母にしつかりと抱かれて、口うつしされている重障児の痛々しい写真が掲げられている。全国に三万人以上もいるといわれるこの重障児の悲惨な記録は、涙なくしては読めない。しかも、これらを収容する全国は、せいぜい四百余人たらずであるという。

脳性小児マヒ。こう名づけられたこれら重障児は、同じ一生を此の世に受けながらも、人生の楽しみも味わえず、そして、若い内に苦しみながら、死んで行くという。一体何の因果であらうか。

この子を生んだ母の苦衷、わが子なる故に愛の手一つで育てる親の心。若し、われわれが、こうした立場におかれたらと思うと、ゾットする。

「私達、親が死んだら、誰がこの子を世話をしてくれるでしょうか」

これが、こうした子を持つ親の一種の悩みである。歩けぬ。小用をたせぬ。ひどいものになると、食事する能力も無い。母親が口うつしで食事を与える以外に道が無いのである。大きな社会問題である。

山陽新聞社は、この問題を取りあげて、岡山県下を中心とした重障児の実体を八カ月間、「心身障害児に愛の手を」という見出しで、八十五回にわたって掲載した。この本はその一部をまとめたものである。

これに感激した学習研究社の古岡秀人社長は、此の出版を引き受け、さらに

「本書から得られる利益のすべてをこれらの施設にささげる」と決意し、今趣意書を作って、広く購読を呼びかけている。その拳はまことに社とすべきものがあるが、またこうした行為こそ、仏教徒の進んでなすべきものと反省もさせられる。こうした機会に、われわれは、重障児の実態を知ると共に、たとえ少しでも、愛の手を差し伸べてやりたいものである。この書の購読をすすめるゆえんである。

常楽我浄の顕現をめざす

涅槃教団 真如苑

藤井正雄



教主謹刻の涅槃像に祈念する教主

東京の最北端、中央線立川駅より歩いて十五分、諏訪神社と相並んだ一角に涅槃を標榜し、現実生活のなかに「常楽我浄」の顕現をめざす真如苑教団の総本部がある。肌寒い一月十一日に長谷川宣丈君とともに訪づれた道場には熱心に信者が車座になって、談合を重ねていた。小雪のバラつく凍てつくような寒々とした外に比べ、道場のなかには、昨年三月教主の還暦とともにめぐってきたこの教団の飛躍的發展

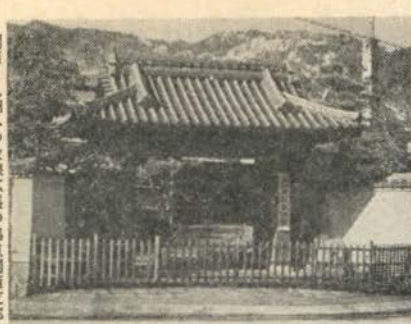
への路線を暗示する慶事のほとぼりの暖かさがこめられていた。

昨年三月、当苑教主の還暦の式典に次いで、伊藤教主が二十七年前に出家得度し、新教団設立の昭和二十三年までその傘下にあった真言宗醍醐派総本山（京都・醍醐寺より教主には大僧正、苑主には権大僧正の位階の荘厳があり、次いで世界にさきがけて東京で初の核兵器禁止平和建設アジア国際会議（略称・アジア核禁会議）が開催されるのを契機に、議長松下正寿立教大学総長をたすけて実行委員の一人として協力した教主に、七月三十日タイ国最大の僧伽ワットバクナムから仏舎利の奉祀があり、秋にはこの返礼として教主自らの謹刻による真如苑の本尊の涅槃像の原型二体のうち一体は真言宗醍醐寺へ、うち一体をワットバクナムへ奉呈された。訪タイにあたっては、十一月六日よりタイ国北部の古い仏都チェンマイ市で世界二十五カ国の代表を集めて開かれた第八回世界仏教徒会議に、全日本仏教連合会のオブザーザーとして列席……と教団の慶事が国の内外から押し寄せて花開き、また、本年三月には教団発祥の地である

立川市の総本部に総予算六億円の予算で「発祥道場」建設の起行式が行われるという。

教団創立十九年の歩み

創始者は現教主伊藤真乘氏、明治三十九三月二十八日山梨県の生れで、教主自らの話によると、飛行機技師として不動明王を信仰するごく平凡な生活を断って一路宗教の世界に踏み入ったのは、昭和十年十二月二十八日に現在の本部に不動明王を迎えたとき教主の妻



関西・九州への教線拡張の拠点関西支部

現在の苑主に靈能が発動したのを契機に、宗教結社「立照閣」を設立したのにはじまるといふ。その後、真

言宗醍醐派総本山醍醐寺で出家得度し、恵印三時、三宝院憲深法などを相承、同十三年醍醐派に僧籍をおいて、「立川不動尊教会」を設立、真言宗醍醐派に所属した。

その後、宗教団体法によって、真言宗となつたのであるが、戦後の「宗教の自由」のもとで宗教団体法から届出制の宗教法人令の施行に伴つて、真言醍醐派には戻らず自然離脱して、同二十三年一月、真言（マコトと読む）をとって「まこと教団」を設立した。

その後、「まこと教団」は戦後の精神的虚脱状態から救いを求める信者は集まつて、五万人を数え、地方教団としてかなり目立った存在に発展した。

この教団の特色というべきものは教主が修行によって得た涅槃経の秘める仏陀の不思議な神通力と、苑主の靈能とを結びあわせた、接心修行Vにあり、信者は修行の際に靈能者を通じて仏に接し、導きをうけて信仰を深め、仏道を成ずるといふ教旨である。

しかし、昭和二十五年夏、教団の発展期に「まこと教団」リンチ事件が起つた。接心修行中に信者に対するリンチが行なわれたとす

る事件で、教団は淫祠邪教のレッテルがはられ、その間に法嗣が病死して、ますます「インチキ宗教」が喧伝されて壊滅寸前の危機にひんした。事の真相は、教団側の資料では、

元幹部の青年が女子信徒との邪恋をたしなんだ管長に対する恨みのためであつたといわれるが、事件は有罪となり、「まこと教団」は解散し、教主の妻が苑主となつて「真如苑」教団としてかろうじて再出発し、管長は教主としての位置についた。

裁判係争中、サツマイモ三つが一日の糧食とまで困窮したといわれ、壊滅寸前に追いやられた教団が、その後の展開から、現在信徒十五万人を数え、冒頭に述べたような、内外にわたる慶事の祝賀と、大発展の礎の年を迎えた秘密の鍵は一体どこにあるのであろうか。

靈能による涅槃経の常楽我淨の顯現

真如苑の特色は靈能の強調にある。その靈能は、現苑主の三代目の伝承によるといわれる。靈能の根元は苑主の祖母にあり、祖母は日朗上人の真筆といわれる曼荼羅を捧持して



真如苑道場 待つ要法莊位正位の大僧より時副醒

昭和初年頃、横浜でいわゆる狐つきなどの憑
依靈の除霊を行なつたといわれる。昭和十
年十二月に本尊不動明王の尊像を勧請したと
き、宝前において苑主が霊能を發動し、また
翌春、偶然にも祖母の霊能をひきついだ第二
代目の伯母が来堂して、宝前において苑
主が感動するや、別室に智文（三歳で死去、
苑主の長男）と共にいた伯母が引きよせられ
るように宝前にきて、入神している苑主と対
座して感應道交し、瑞氣がただようなかに、
霊能の受け剛きがなされたという（真如苑編

「一如の道」八頁）
現在、教団を支える人接心Vの基本は、霊道の質的転換にある。昭和十一年六

月長子である智文の他界を機に、智文の霊が
母親である苑主に感應することによって顕幽
一如の救いの道が開かれ、それまでの法華経
にもとづく霊道が、教主によって涅槃經によ
る霊道——此岸に仏土を開顯し、大般涅槃究
極の本旨である一切衆生悉有仏性を、常業我
浄に顯揚して、歡喜の世界の開花——へと質
的な転換がなされたといえる。

真如苑のパンフレットをみてみよう。それ
によると「接心修行は、単的にいえば、仏陀
の精神を把握するためにあります。そして、
その修行から得た精神を日常生活に活現して
奉仕と愛他に生かすことです。その心を多く
の人々に知らしめるために、真如苑では、お
よそ二〇〇人の「霊能者」が、重要な役割を
果しています……」

かくして、真如苑の信者は、接心を通し
て、歡喜の世界が開かれ、「われ己に久しく
この大涅槃に住して種々神通変化を現す」
（大般涅槃經四相品第六）ということにな
る。信者の言葉を聞いてみよう

○……火事のことになりますけれど、その
時、母がとても落ちついて居りまして、

電話で御本部に「隣が火事で家も焼けそ
うですから御祈念して下さい」と、おね
がいのです。

K その事、お聞きしました。早朝でもあ
り、お風邪気味で、まだお休みになつて
いらした教主様が、お電話を受けられ
て、すぐ祈念して下さいと——

○ 申訳けないことでした。

そして、御祈念をして頂いた時刻に、今
まで、どんな広がつて、火の粉を吹き
あげて燃えていた火が、急に鎮まってみ
ているうちに消えていったのです。

一刻を争うと云いますけれども、あと
一分もえていたら隣の油機械工場に火が
移って家も完全に駄目だったと思いま
す。……

それに、我家が救われたばかりでな
く、焼けたアパートの一室を家では（紳
士服仕立て商）倉庫として借りていたの
で、中には洋服生地や道具類が沢山入っ
ていました。

その室の両隣は丸焼けになり、向いの
室は八分通り焼けてしまったのですが、

私のところで借りていた室だけが焼けのこって、沢山の生地類も全部無事でございました。

こういうことは本当に御守護のたまものというより外にはありません。

K 焼ける、焼けない、は本当に紙一重です。徳と因縁——。

常日ごろの徳づくりの行いが、こういう時に、大きな功德力となって現われるのではないのでしょうか。

勿論、み仏さまのおちからが無かったら、功德力というものも現われませんか……ね。(対談「現代の奇跡」、歡喜

世界、一九六六・春 夏 NO.8—8)

以上の信者の会話から窺れるように信者の教主夫妻による霊力とそれによせる絶対的信頼は、教主夫妻を双親様と呼んでいることからもうかがい知ることができる。接心は、真言でいう、阿字観・月字輪・観入・我我入・観などの観法に坐禪を融合させた伊藤教主夫妻による独自の修法であり、その修法の考察が教団発展の原動力となったのである。

現在、真如苑は総本部を立川におき、東京

教主「華中の春」のお祝に参集する信者の群れ



・秋田の両支部に、関西本部、茨城本部に事務所がおかれ、十六教区、三十四分教区のもとに最小五〇世帯からなる集団を有して、十五万人の教徒、一日につき一、五〇〇人の信者が生れているといわれる。

真如苑は、両極端に既成教団、新興教団をおけば、針は両極端にわたって振幅する。教主は新宗連理事をつとめ、また、最初に述べたように真言宗醍醐派から別派独立した教団で、戦後突如として雨後のたけのこのように生れ出した新興教団とは異なる。中外日報によると、次期の世界仏教徒会議の開催を日本で行うために、国際仏教界のリーダーシップを

確立するために宗教界の一致協力の計画をしているという。折も折り、真如苑教主が第八回世界仏教徒会議に全日本教会代表の資格で、新仏教としての初の参加は画期的であるといつてよい。(昭・四一・十・一)

他教団との宗教協力といった場合、信仰を異にする以上、当然相互理解には限界が存在する。ここにおいても、また、新興教団とは何かが問題となってくるであろう。新宗連が強調する国民皆信仰運動、全仏教の宗教協力は、単に表面的な政治的な協力を意味しているのであらうか。次号では、宗教協力を積極的に唱導する『立正佼成会』を訪問して、この点をさらにみてみよう。



「秋の大祭」風景

お茶をおいしく その2

家庭用卓上の手前



上手な

玉露の入れ方

黄檗幽茗流家元

三 浦 純 亭

お茶をたのしむと申しますと、やはり玉露につきます。玉露は茶摘みの二十日前後四月上旬に新芽が出る頃、人の出入りが出来る程度の「簾簾」を張り、周囲に「孤」を掛けて日光の直射をさけます。こうすることにより同化作用を防ぎ、葉茶の蛋白質がよく分解して、アミノ酸のような味を良くする成分が増し玉露独特の甘味が出ます。亦、光線の関係から茶の色は非常に鮮緑になります。斯様にして作られた玉露を微温湯で入れられることは、既に皆様もよく御存じでございます。が、煎茶は香り、玉露は香りと味をたのしみますので、熱湯でいただきますとまろやかな味は失われます。

玉露は微温湯で入れることを「淹茶」と申して、その入れ方は煎茶よりも大目にお茶を使います。

おいしく入れます方法は、五人分と致しまして、玉露大匙山盛り一杯を宝瓶（ほうびん）と申します手の

ない急須に入れまして、一肌にさまりました微温湯（四〇度）を端の方から、茶の葉がひたひたになるくらい静かに注ぎ、二・三分置きます。（このとき主婦に繁雑な生活から静かに物考える時間を与えてくれます。）茶碗は中が白地（茶の色がよく判るため）がよろしゅうございますが、趣味的な物をお選び下さっても結構でございます。注ぎ分けます時は、自分の茶碗で色をためし、各々の茶碗に二、三滴ずつ注ぎます。必ず少なくとも一往復は遊ばして下さい。

一煎目は香りとまろやかな甘味が出ます。

二煎目は絞り切った上に微温湯をさし、この場合は一煎目よりやや早目に注ぎ分けます。

茶の葉が半分開いているため、間を置き過ぎますと苦味が多くなります。一煎、二煎とも余り変化のない味を出す一つのこつです。淹茶（法式）の御手前としては普通は二煎にとどめますが、御家庭では三回入れまして、三様の味をたのしむことが出来ます。

いただき方の作法としては、一煎目に茶の香りと味をたのしみ、二煎目に一口いただい葉子をいただき、そして残りの茶を喫しま

す。

味わい方は、舌の上にころがすようにしてお味わい下さい。飲むということより味わうという言葉が適切です。

夏目漱石は、このお茶を大変好まれまして、『草枕』の一節の中にも、『朱泥の急須から緑を含む琥珀色の玉液を、二、三滴ずつ茶碗の底へしたたらす。』(中略)

普通の人は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違いだ。舌頭へぼたりと載せて清いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液は殆んどない馥郁たる匂が食道から胃の中へしみ渡るのみである。」と申しております。

又、三様の味わいを、私は、

「一煎目は甘く人生の若さをうたい、

二煎目はややにがく人生苦たとえ、

三煎目は渋くなり、後年の遠視した人間的渋さ」として、味わい教えております。

カットのように自然の花を一輪差し、めでながら自然を連想し、一本の香に心静ませ、繁雑な生活から離れ、静寂なひとときを王露に楽しんでいただくことこそ、茶の真の味わいと云えましょう。要するに「禪的な自由無

礙の境界に遊びながら茶の美味を堪能する」というのが煎茶の道の行き方であります。

又、いくら良いお茶をお求めになりましても水が悪ければ、味は半減されます。良質なお茶と共に水を選び、火加減、間の大切さ、又、沸し器にも御心をおとめ下さいませ。

それでは、「水」について考えて見たいと存じます。

昔は、天然の水をたやすく得られたようでごさいます。常に応じますように、山の水を上、川の水を中、井戸の水を下といひます。山の水は、ゆるやかに湧き出する水を選びますが、唯今はなかなか思うようになりませんので、このことをよく御心におとめいただきまして、たまさか山にお遊びのお帰りには、空の水筒に山の清らかな水をお土産にお持ち帰りになり、王露を味わわれるのも、又一興かと存じます。又、自然の大気の中で清水をすくい、其の場で水流にて王露を味わわれるのも、なかなかすがたいたいものでございます。(水流の入れ方は次回に)

しかし、現実には、我々の生活では、水道

を用いますので、御存じの通り水道の水の中は、消毒用のカルキが含まれておりますのでこの臭みを消しますためにもせめて、一時間なりともお茶をお入れになる前に、器にお汲み置き下さい。よくを申しますれば一昼夜くらい置きたいものです。

さて、上手に取りました水を沸しますには、鉄瓶もよろしゅうございますが、保富良(ほうふら)と申します上葉のない素焼の土瓶がよろしく、この沸し器をお進めいたします。

保富良はお湯が大変にやわらかく沸きますので、煎茶家はこれを用いております。茶道具屋にまいりますと五、六百円くらいで求められますので、一度お試しになってみてはいかがでしょうか。炭火の場合でございましたならば、よくおきた火がよく、ガスの場合でしたら素焼であるためにもろく、石綿の金網で強火をお防せ下さいませ。

三月は日常いただく「煎茶の入れ方」について、お話し申し上げたいと存じます。

浄土宗のおしえ <2>

四修について

大谷 旭 雄

前号で私たち浄土宗徒にとって最も大切な心構えとされる安心つまり三心について述べましたので、これをもって一応安心の内容をご理解いただけたものと仮定して、今回は「もし安心を知らば作業を知るべし故に四修を明す」△決疑抄Vといわれるように作業についてお話ししてみたいと思います。

いかに私達が浄土の安心を具足して本願称名の念仏にはげむことができて、往生浄土

の目的の爲にはそれが一時的でなく、生涯これを相続していくことがのぞまれ、また理想とされなくてはなりません。しかし実際には私達凡夫にとってはせっかくわきまえることのできた安心も退転しやすくまた起行としての称名念仏の行もとかく相続し難いものであります。そこで弥陀の救いをたのんで念仏を相続し、正しい念仏生活をおくって行く上に私たちはどういう態度でのぞむべきかが問題となつてきます。そこに念仏するものものとするべき態度が示される必要があるのであります。

このような態度を安心と起行について作業といい、この作業に四種類あることからこれを四修と呼ぶのであります。

この四修については『往生礼讃』や『西方要決』にくわしく記されていますが、宗祖は主にこれらによって『選択集』第九章にこれを記しております。この四修とは○恭敬修（くぎょうしゅ）○無間修（むけんじゅ）○無余修（むよしゅ）○長時修（ちようじしゅ）のことで、その名は浄土教にかぎらず『撰大乗論（しょうだいじようろん）』『俱舍論（くし

やるん）』などにも修行者の態度として記されています。

しかし、いま浄土宗という四修はそれと名目は同じでもその意味は異なるもので、とくに念仏するものものとするべき生活態度の規範として定められたものであります。

まず四修の第一、恭敬修というのは阿弥陀如来をはじめ、浄土の仏・菩薩を心のうちに敬い、尊び、おもてにこれを礼拝するのをいうのであります。この恭敬修については『西方要決』という書物には、さらにくわしく恭敬の対象として五種をあげて説明しています。

その第一は有縁の聖人を敬うこと。これは重複しますが有縁の聖人とはつまり阿弥陀仏をはじめとする浄土の仏。菩薩を敬うことであり、阿弥陀仏の教をうけようとする私たちがまず阿弥陀仏を敬うことは当然であります。しかし、さらにこまかくこれをいうと理想としてはいかなるときでも西方の浄土に背を向けてはならない。たとえば宗祖の門人熊谷直実はよくこのことを忘れず京より関東に下るときも鞍をさかきにして馬にまたがって上京したと伝えられるのは有名な話でありま

す。また、み仏に向つてツバをはいたり、大小便等の不浄を行うことは許されません。宗祖の高弟で証空上人という方は特にこの恭敬修に徹した方で、不浄のたびに四十八遍も手を洗い浄めたと伝えられています。△勅伝V

第二は有縁の像經を敬うこと。つまり、阿彌陀仏の像（木像、画像）や、私どものよりどころである浄土の三部經の所説を敬うことであります。このことは平素、阿彌陀仏を中心に祖先の位はいを安置した御仏壇に香華をそなえて三部經を誦誦し念仏している私たちは、すでにこれを実行済みということがありますが、さらにこれを続けていけばよいのであります。

第三には有縁の善知識を敬うこと。つまり浄土の教えを説きひろめる人、あるいは浄土教以外の伝導者を敬うことであります。私たちが菩提所の住職を敬い、親しく近づいて教導を受けることもその一例であります。

第四には同縁の伴を敬うこと。つまり自分と同じく浄土の教えを信奉し、ともに念仏にあげむ同信、同行のよきとを敬うことであります。宗祖の御手紙に「おなじ心に極樂を

ねがい念仏を申さん人をばたとひ卑賤な人なりとも父母師匠にもおとらずとおほしめすべし」といひ、さらに「今生の財宝のともしからんにもちからをくわえたもうべし」△和語灯録Vとすめられるのも、このことをさすものであります。

第五には三宝を敬うこと。有名な聖徳太子の『十七条憲法』の第二条に「アツク三宝ヲ敬へ三宝トハ仏法僧三宝ナリ」といわれるようにに仏法僧の三宝を敬うことで、特にこのようにいわれるのは仏教の根本である三宝を敬う心なくして仏教も浄土教もありえないからであります。

第二は無間修であります。無間というのはすきまのないこと、隔てないことなどの意味で阿彌陀さまを敬って礼拝し（恭敬礼拝）、たたえて名号をとなえ（讃嘆称名）、浄土のすがたを観察しておもいつづけ（觀察憶念）ふりむけて往生をねがう（回向発願）などの浄土の正行からさらに浄土の正行へとたえず継続していくことであります。それではどういうものが念仏を相続していく上に隔てなくなるのかといえ、まず念仏以外の余

行をあわせて修するときで、こうしたときには阿彌陀仏への帰依が不純になるだけでなくついに念仏のもつ目的を失うことになるからであります。またボンノウをさしはさむこともへだてとなります。しかし実際には私たちはボンノウ具足の凡夫といわれますように念仏と念仏の間にボンノウをさしはさむなどいつてもしよせんむりな注文であります。そこで善導大師は、か様な人間の本質をみきわめて念仏の間にボンノウが起ったとき修行者の機根に応じて懺悔の（サンゲ）法を修せばよいといわれています。つまり念仏道という軌道走る列車は軌道をはずれて脱線したり、あるいは停車させられてしまふおそれがある。そうしたときにはいち早く懺悔という補修工事をなせば、もとの軌道へ接続して元通り運行していくことができるというのであります。しかも、浄土宗という懺悔はむずかしい作法を別に修するのでなく「念々の称名は常の懺悔なり」といわれるように念仏することはそのまま懺悔の法なのであります。それは念仏に滅罪の功德があり、また念仏が懺悔といって懺悔にも似た厳しい自己内省を土

台としているからであります。

また『西方要決』にはこの無間修を説明して、常に念仏して心に往生を念願せよといひ、いつでも心を浄土に向けて想いはかるべきであるといっていますがここでこのように無間に心を運んでゆくことのいかに効果が多いかについてヒユをもつて説明していますので、いまこれに類似した一例を記しておこうと思います。

敗戦によつてもおもいがけなくも戦犯として厳寒のシベリヤに捕虜として抑留された同朋は少くない。ある戦友は飢と寒さと厳しい労働で貴い命を失ひ、捕虜たちの日々は言語を絶する艱難辛苦の連続であり、帰ろうと思つても許されなかつた。しかしそうした中にも一日一刻として胸中には故国の両親や肉身を思慕しない時はなかつたと聞く。やがて待望の帰国の日がおとすれ、故国の岸壁に待ちわびる両親をはじめ肉身に再会した時、異国の丘で永年にわたつて思いつづけた隔てない思慕の念はここにたとえようもない喜びとして爆発したことであろう。これと同様に浄土の慈父弥陀さまの教えをきき、日夜たえず無

間に浄土の正行を修しつづけて弥陀のみ國に至ったとき、その喜びはたとえがたいものであろう。決して無間の思慕なくしては味えないことでありましよう。

第三は無余修であります。この無余というのは文字の上からみると一見何でもかんでも余すところなく修するという意味に受けとれるかと思いますが、いま浄土教でいう無余というのは専らとか純一無雜とかいう意味で、信仰の上では専ら阿弥陀仏の行（念仏）、もしくはそれに統一された行（五正行）のみを修してあれもこれもと多方面にわたつて分散した行動をとらないようにすることをいうのであります。『選択集』にはこのことを「専らかの仏の名号を念じ、専ら礼し、専らかの仏及び彼土の一切の聖衆等を讃えて余行をまじえざれ」と記されています。一言にしていえばただひとすじの念仏を無余修というのであります。

第四に長時修というのは「命終らんまで中止せざれ」と記されるように念仏生活に入ってから人生の終るまで一貫して行うということであります。宗祖はこの長時修について

「この三修（恭敬・無間・無念）の行を成就せしめんが爲に長時をもつて三修に属して通じて修せしむるところなり」といわれておりますから、長時修というのは先の三修を生涯かけて相続してゆくことをいうのであります。

以上浄土の四修について記しましたが、この四修が安心（三心）と同様、欠くことのないもので私達にとって大切な態度であることは云うまでもありません。従つてこのうちどの修が一番重要であるかは念仏するものの機根によつて異なることで、つまり、他をして下げしむような憍慢心（きよまんしん）のつよい人には恭敬修が、あれもこれもいろいろの行に走り易い人には無余修が、どうもなまけたり、中断しがちな懈怠（けだい）の人には無間修が大切であるということができま

す。
しかし宗祖御自身は「四修の中においては無間修を要となす」八漢語灯録Ⅴともうされて無間修を重視されたのは、宗祖がとかく懈怠の心におちいり易い私たちのすがたを見抜かれてのことでありましよう。

涅槃へねはんVとは、もとは、迷いのなくなつた境地をさすことばであるが、他陀の入に降りそそいだ。また、天の妙樂は虚空から滅をさすことばとしても、もちいられていなりひびいた。

仏陀は、阿難にいわれた。

○
「阿難よ、この供養は、如来があがめ、尊んでするのではない。比丘でも、在家信者で、治師の、チუნダのところに泊られた。翌朝を最上にあがめ尊び、供養するのだ。だから、血便があつた。それは、食事のなかにあるように。」

阿難は、悲しみにうちひしかれさめざめと泣いた。

「ああ、わたしには、学ぶことが数多くのこつてゐるのに、わたしをのこして、教主は逝かれるのか」

このとき、仏陀から、むかえがきた。阿難が、ちかつくと、仏陀は、しずかに語られるのであった。

阿難が床を敷くと、仏陀は右脇を下にして、足の上に足をかさねて、心しずかに横たわられた。

そのとき、沙羅の双樹は、ときならざる花がひらき、花びらが如来のからだに散り、天

度生じたものは、いつまでも存することはな

い。阿難よ、おまえは、ながい間わたしにつかえてくれた。おまえの挙止は慈愛にみちていた。ことばも、思いも、慈愛としんせつにみちていた。さらに、精進すように。

阿難よ、また「われらの教主のことばは終つた。もはや教主はない」とおもふかもしれない。だが、わたしによつて説かれおしえられた、教法と戒律は、わたし亡きあとのおまえらの師である。

仏陀は、また、比丘たちにむかつて、おしえられた。

「すべてのものは、壞法である。おこたるへ放逸Vことなく努力精進するがよい」

これを最後のことばとして、仏陀は入滅された。その日は、二月十五日御年八十才であ

られた。

○

「阿難よ、悲しむな、泣くな。わたしは、かつて説いた。すべて愛し親しめるものも、生き別れ死にわかれをしなくてはならないことを。」

すべてのものは壞法へえほうVであり、一今昔物語にみえている。

行誠上人街頭で饅頭を食う

行誠上人若かりし頃は、まことに容姿端麗な青年であった。かつて幕府の大奥にあったとき、大奥の女中たちの憧れの的であり、寺に帰って衣を解くと、その袖のなかからいつも数通の艶書が出てきたといわれている。

行誠上人がのちに知恩院に入り浄土宗の管長となられたが、あるとき各派の管長と相会した折りに、「お互に管長などということとは、豆腐ぐらいしか食べられなくなってからすることでごさるよ。」と云ってのけて各宗の管長をあ然とさせた。

知恩院には門主のために専用の風呂がある。

あるとき、上人は突然町の銭湯に行くんだといひ出した。

侍僧が一べんは止めたが、一向にきかないので、仕方なし

四条の銭湯に案内した。

ところが銭湯の帰りみち、饅頭屋の前を通ると、丁度せいろうからあげたばかりの饅頭が店頭にならんでいた。

それをみつけた行誠さんはツカツカと店さきに歩みより、一つつまむと、口へなげこんだ。

ちょうどそこへ東福寺の管長が紫衣の正装で通りかかった。

さっそく行誠上人は呼びとめて、

「これ東福寺さん、うまい饅頭だが一ついかがでござるか」。

「では一ついただこう。いかにも美味しうござる。」

と二人の老僧は、店頭の立食をしながら洒々然たるものであった。

行誠上人が箱根の石内という旅館にゆかれた時のこと、「南無妙法蓮華経」の七字の題目を揮毫されたことがある。

その時旅館の亭主が上人に一つ御揮毫をと頼みこんだのだが、上人は亭主の宗旨をたずねて、「日蓮宗」と聞いたので何のこだわりもなく七字の題目を記されたのであった。

よく、「釈迦牟尼世尊に宗旨なし、宗旨は人によりて建つ仏法をもて宗旨を説くべし、宗旨をもって仏法をとくことなかれ。」と云われた。

現代において味わい深き言葉である。

あるとき、横浜の高島嘉右エ門（後易学の大家）という人のところに招待されたことがあった。

その折に主人の嘉右エ門は上人をもてなすために、ある歌人の女性をよんで上人に給仕させた。

すると上人はその時連れていた侍僧たちに向って、

「このかたは女性の身にしてなおかつかくの如く歌道に堪能である。お前たちも精神努力しなければ恥しいことである。」

とその女性を賞讃し、一同を戒しめたので一同は肅然とした。

ところがその女性は、「絵も描きます。」といって今度は絵を描いて上人におみせした。すると上人は今度はその女性に、

歌をよむ女房などは持たぬもの

亭主をしりにしきしまの道

と狂歌一首をよまれて与えられた。

晩年よく上人は、「みなは一度成仏するが、わしはなしくづしに成仏する」といわれていた。

それは耳が遠くてよく聞えなかったので耳だけが一步先きに成仏しているという意味であった。

祐天上人の死霊成仏

祐天上人が土浦の常福寺において巡しやく中のこと、深谷源左エ門という人が上人にとくに面会をもとめてきた。

後妻が死霊にとりつかれて苦悩する様子をうったえて、「み仏の大慈悲と念仏の功力によって、死霊を成仏させて病人を平癒して頂きますよう。」と懇願した。

そのことを聞いて上人は深く同情したがこんどの説法は七日間の入仏供養であるため満願になるまでは外出することができないのであった。

そこで寺においては上人が一夜中念仏回向することとし、源左エ門の家には名代の僧をつかわすことにした。

上人は、「家の方でも百万遍念仏を修行すれば、いささかなりとも験もみえるであろう。私も丹誠こめて祈念しよう」といわれた。

源左エ門は家に戻り、一家一門近所の人々も相会して百万遍を唱え、まごころこめて念仏を修していると、夜半病人が起きあがり紙と筆をもってこさせた。

百姓の生れで字など書いたこともないかの女のことだから

一同不思議に思ったが病人のいう通りにした。

病人は筆をとりあげてサラサラと何にかを書き散らし源左エ門にわたし、そのまま意識を失ってしまった。

急いで文句を読んでみると、

「一筆申しアゲ参ラセ候、私事病ニ侵サレ世去ルコト定業ノサ難キ故ナリ、サレバ残セル二人ノ子供ニ不慙サヲ感ジ源左エ門殿ヘ子供ノ事委ク申シ置候。

後妻ヲ必ズ迎エタマウベカラズ曰全ク嫉妬ノ心ニテハナク只二人ノ者ヲママ母ノ手ニカケンコト草葉ノ陰ニテモ不慙ニ存ジ未来ノ障リニモナリナント返ス返スモ頼ミ置キ候甲斐モナク、五十日過ギヌ内ニ後妻ヲ迎エテワガ衣裳諸道具マデタダ今ノ妻ニアタエ、ソノ上ワレ案ジタルニタガワズ子供ヲママ母ノ手ニカケル事マコトニ不慙ニ思フ故当妻ニトリツキ成仏ヲエザルトコロ、祐天上人ノ御化益ヲモツテ成仏得脱届ケ申シ候、右御礼トシテ書キ残シ参ラセ候。」

と認めてあった。

読み終つて源左エ門もその座に居合せた人々も不思議なおもい、その手脈をデットみると、まぎれもなく亡妻の手跡で文書に筆勢まで相違ないのである。

源左エ門はじめ一堂に会する人々が、静かにしかしきことの心をこめて念仏する声は夜が明けるまで続けられた。

程なく明けがた近くになって病人も本性にたちかえったが、字を書くことは何にも覚えもないといった。

このことを祐天上人に伝えたところ、昨夜夢の告げがあった、もはや靈魂成仏したことを知っていたという。

のちに、源左エ門も日蓮宗であったのを改宗して浄土宗となり、祐天上人の日課念仏の弟子となった。

このものがたりは祐天上人が常福寺の方丈へ、念仏の奇特なことを末代の衆生につたえるためにかきのこされているものである。

新会員紹介

静岡市南安倍町一	稲森銀次郎
東京都豊島区西巣鴨大正大学光林寮	岡崎澄
東京都武蔵野市御殿山二十一ー七	黒塚ひさ子
大阪府泉南郡岬町淡輪	本山重昌
静岡県掛川市掛川	泉昭雄

武偃和元

(二) 不落攻難

泉 湛 田 鶴

冬の陣をかえり見ると、駿府を發った家康が京都の二条城に着いたのが、慶長十九年十月廿三日であった。秀忠は翌十日に伏見城に入った。それから十五日に出陣して、十七日夜、家康は住吉に陣し、秀忠は平野に着陣した。関東勢十八万、成は二十万と称された大軍勢が巨大な城を包圍して数回攻撃を試みたが、損害が予想外に大きかった。野戦に巧みな家康が天下の大軍を傾けて攻め立てたので

あるから、その月のうちにも片付きそうにとの武將も思ったが、十二月に入っても容易に落城しそうにもなかった。

殊に十二月四日の総攻撃も失敗に終わったので、さすがに歴戦の雄である家康も内心焦慮を感じたに違いない。

大阪方では軍議を凝らした結果いよいよ籠城ときまると、武器、彈藥、兵糧その他の必要な物資を大急ぎで取り揃えたと共に、突貫工事で城の補強が行われた。

大阪城は、太閤秀吉が自慢しただけあって要害堅固に出来ていた。巨城は広大な二の丸、三の丸によって囲まれ、その外郭は西北の方方は淀川の流れがあり、東の方は平野川、河内川、巨摩川の水が一つに落ち合い、鴨野口にて淀川、大和川も一つに落ち合っている。

三方はこのように天然の固めとなっていたが、南の方はさしたる天然の要害がなかった。高津から玉造まで土居を築き乾堀をつくって外郭の要害を構えたが、これを総濠と名づけられた。この総濠は又総構と呼ばれたが、臨時の防禦施設にすぎなかった。

およそ三里半にわたるこの総濠には、堅固な塀、矢倉が設けられ、又、弓鉄砲の狭間が切られ、更に一丁間隔ほどに石火矢（大砲）を一台ずつ配置し、更にその間には大筒、小筒、弓矢をとりそろえて備えていた。又、塀の中には刀や鉞がまき散らされていた。

この方面には真田の進言によって平野口の黒門の外に半月形の出丸を築いた。これが有名な真田の出丸であった。ここは大阪城攻撃のためのま正面に当るのであった。

難攻不落と記された城に、更にこのように堅固に要心深く防禦設備が施されていたのであるから、家康がいかに天下の大軍をもって攻めよせても、そうたやすくは落ちなかったのである。

それ故に、城兵も互にこう誇り合っていた。「天險に加ふるに人力をもつて戦うのだ。」

兵は多く食も足りている。昔よりかような堅城は未だかつてなかった。東軍がいかに天下の兵を挙げて攻めようとも、五年の間は必らず抜くことが出来ないであらう。」

と豪語し旺盛な戦意にみちていた。家康の胸中には大軍をもって大阪城を完全

に包圍陣を敷いただけで牢人どもはおそれをなして四散してしまい、秀頼は直ぐ開城してくると考えていたかも知れない。

こんな自信を持たせたのは、強大な大軍もあることながら、戦国の常の習いとしてあらかじめ城中に巧みに内応者を送りこんでいたからである。堅城も城内に内応者がいた場合には、陥落するのが普通であった。家康の期待に反して成る者は既に発覚して殺されていたので、城方の抵抗は意外にきびしかったのだ。

冬の陣では、さして目覚ましい戦はなかった。

十一月廿一日の九鬼守隆、向井忠勝等の水軍による野田、福島攻撃、それに廿六日の鴨野、今福の合戦が主なるものであった。

廿六日、大阪方の渡辺綱、竹田水翁等が壘万二千の兵を率いて出て来た。この時、先頭部隊の佐竹勢が総崩れとなり、佐竹義宣自ら刀を揮って兵を指揮せねばならないほどであった。しかし大阪勢の猛攻は恐れをなした佐竹勢は完全に戦意を失っていたので、どうしても陣を立て直すことが出来なかった。義宣

は、やむなく上杉勢の加勢を求めたが大阪勢は上杉勢をも蹴散らし一時退却を余儀なくせしめた。

その後ようやく反撃することが出来て辛うじて大阪勢を退却せしめたのであった。

十二月一日に行われた総攻撃も、城内から火矢を一斉にあびせかけられて退かねばならなかった。

ついで三日、前田利常が真田丸を攻め立て井伊直孝も之を応援したが犠牲が多く大敗を喫してしまった。秀忠は前田と井伊の軽挙を厳しく譴責したほどであった。

こんな風に東軍の戦績はあまりかんばしいものではなかった。一度び大兵をもって包圍しても容易にその目的を達することが出来ないことを事実をもって明らかに証明されるので、家康は講和策を練らざるを得なかった。一方攻撃のために、とてつもない計画が実行されていた。

春日井（長柄川）に堤を築いて淀川を堵ぎとめ、水の中津川に導いて天満川を干してしまいう計画を立て、工事を急がせた。

もう一つはいわゆるもぐら戦術であって、

真田、井伊、藤堂らの持ち場附近から地下を潜って城内の本丸のま下までとんねるをうがち、火薬をつめて爆発さし、大阪城を一挙に根こそぎ吹きとばしてしまおうという計画である。このため佐渡、石見、甲斐の金堀人夫を使つて穴をうがたしめた。

こうして十六日には、最大の威嚇射撃が行われた。包圍した大軍が一斉に打ち出す銃砲の響は、耳をつんざき天地をゆるがすばかりの物すごさであった。大阪を遠くはなれた有馬や京都まで砲声がきこえたという。

堀田右エ門は東軍のこの威嚇の砲撃の仕返しに、十七日の夜、蜂須賀の陣を夜襲して至鎮の心胆を寒からしめたのだった。

当時の我が国の大砲の射程距離は、大阪城の外濠からでは、天守閣へはとどかないほど貧弱であった。それ故に家康は十一月廿七日にオランダ人に大砲を求めたが、彼等は早速と十二門の大砲を献上して来た。築山を高く築ぎあげそこにこの巨砲をすえて打ち込んだのだった。

家康の講和えの呼びかけに対し、織田有楽がしきりに働きかけ、真田と後藤はこれに賛

意を表したが、秀頼、淀殿をはじめ諸軍等の強硬派は講和をしぶっていたのであるが、十六日に砲撃された時、物すごい音を立てながら飛んで来た巨砲が、天守閣の二重目の柱にあたつて柱が折れ物入れが倒れて侍女二人がその下敷となつて粉砕されたため、淀殿もおそろしくなつて急に講和に傾いたといわれている。

講和に反対であつたのは大阪の秀頼のみではなかつた。関東の將軍秀忠もまっこうから講和に反対であつた。それ故に十二月五日、秀忠は土井利勝を住吉の本陣の家康の許に使わし、

「日本の諸軍勢ここに馳せ参じていますのに、これしきの城を何が故に攻め落されないのですか。和平をして後難が起つたらどうなされますか。近々日限を定めて攻め入りたもうべきでございます。」

と申し入れたが、この申し出を家康は頭としてしりぞけてしまつた。

家康が講和をあせつたのは、東軍の死傷による犠牲が多く戦況が思つたほどかんばしくないことによるとも見られるが、もう一つの

理由としては、戦況が膠着すると当然長期戦とならざるを得ないことを恐れたのであるまいか。大阪城の規模は大きくて完全な包囲作戦はとりがたかつたし、持久戦にしても兵力の消耗はまぬがれない。大阪城に兵糧と弾薬とがつすけば、それほどたやすく落城するはずがない。長居は軍を危くするおそれがあると考えたことであらう。

季節は折から正月を間近かに迎えて酷寒に入ろうとしている。不自由な野営に於て酷寒を凌がなければならなくなると、倦怠と疲労が加わつてくるし、又、厭戦気分陥らぬとは限らない。又、東軍の形勢の非なるを見て諸將のうちにも変心するものがあるかも知れなかつた。このおそれがないでもなかつた。

事実、浅野長晟が城中に内応するという風説が行われたほどである。長晟の陣は今宮にあつたが家康はこの風説を耳にすると直ちに伊達政宗に命じて、長晟の陣を伊達の後に移さしめたが、これは十一月廿七日のことであつた。家康としては、大阪の将士の旺盛な士気を挫き戦意を動揺せしめるためにも、講和

が有利と考えていたことであらう。

一方、大阪方としても軍備を十分とのえぬ間に戦に入つたこととて、久しい籠城に堪え得られる見込も薄らぎつた。又、新規に召しかかえた年人の中にも疑わしい連中も相当まぎれ込んでいたし、譜代の武將といへども当に出来ぬ者もいた。

家康は、藤堂高虎に命じて、両軍の武將の南条忠成を味方に誘い込ませている。温厚な彼はこれを拒み切れず、堀柱の根を断つて寄牛を引き入れる約束をしていたという。十二月四日、南条の判意が知れると、忠成は部下の兵三十名とともに捕えられ、その翌日に処刑されてしまつた。南条は老万名の譜代の武將であつた。事実東軍の密偵もかなりいたらしい。

板倉勝重の臣、朝比奈兵右エ門のような歴然たる東軍の廻し者もいた。

彼は初め七郎長の一人、伊市丹後守の抱えの中の人数にまぎれ込んでいたし、又、夏の陣の時には秀頼の船奉行の樋口淡路守の牛の中にかくれていた。

勝れた浄土教を再確認のため

知っておきたい邪宗のカラクリ

五、これが真実なら日蓮上人は希代の悪僧

日蓮上人は大石寺の板御本尊のまん中に小さく南無釈迦牟尼仏（釈迦牟尼仏に帰依せよ）と明らかに教えてある。ところが講義書四八

頁上段に『執着を離れて人生はあるべきはず

がありません。これは御義口伝（日蓮が語ったことを日興上人が記録したもの）御書全集

七七三頁の薬王品の項に「離の字をば明とよ

むなり」と、おおせられているように、諸の

城着を明らかにすると読むべきであります。

日蓮大聖人は御義口伝において、法華経の文

字をば一箇所だけ変えておられるのでありま

す。われわれにはみな執着があります。執着

がなかったら人間ではなくてお化けでありま

す」と説明してある。これは方便品にある

「令離著者（諸の著を離れしむ）の離の字で

あり、仏教に最も大切な所の一字を入れ替えているので、この為に日蓮の説く法華経は実際には骨抜きで形だけのものなので仏教ではないのである。

ここで日蓮の人格が考えられる。表向きは

釈尊に帰依しますと大石寺の板まんだらに書

いておきながら裏面では『離れることを承知

さえしていれば、そのように行なわなくとも

よいのだ」と釈尊の教えの根本思想を勝手に

変えてそれが真実の法華経であると宣伝して

いる日蓮は希代のインチキ悪僧であるとはっ

きり云えるのである。しかもこれが創価学会

の教義の根本をなしているのであるから邪宗

は恐ろしい。

例えば、ガンで苦しんでいる人を釈尊が診察すればこれはまだ手後れではないから手術

により必ず治ると説明するであらう、これに對し日蓮はガンを自覚すれば別に手当しないでもそのままでよいと云うに違いない。一字を変えた為、人を救う釈尊と人を見殺しにする日蓮と出来たわけである。どちらを選ぶかは自ら明らかなことである。

六、理解できない所破と借文

講義書一四頁上段に『日蓮大聖人が、この釈尊の經文を読む理由に、二つあります。方便品を読みますのは、所破、借文のためであります。所破といひますのは、釈尊の仏法は

末法の仏法でありませんから全然役に立たないという意味で、破折して読むのでありま

す。借文といひますのは、この方便品の文を

借りまして、日蓮大聖人の悟りの境涯、南無

妙法蓮華経の御本尊の功德をあらわすのであ

ります。同じく寿量品を読みますのは、所破

と所用という意味からであります。寿量品の

文底には南無妙法蓮華経が秘し沈められてお

りますから、それを用いるのが所用でありま

す」とある。この中に釈尊の仏法は全然役に

立たないから破折して読むとありますが、若

し真実役に立たないものであるならば、無理

に読まずに捨てればよいのである。靴の底が抜けて使えなくなったのは捨てればよいのでそれを無理に使う理由はない。若しどうしても捨てられない場合は、『頼るものはそれ一つしかない』ことになる。つまり真理を説いた経は釈尊のそれしかない為、口では役に立たないと云っても事実は捨てられない真実の深さと大きさがあるのである。それ故日蓮が功德をあらわす為に方便品を借りるより他に方法はないのである。即ち日蓮は方便品の力を借りなければ何もできない者なのであり、それだけ方便品の偉大さが証明されるのである。

説明のできない創価学会教義

創価学会では日蓮が本仏であるとしてこれに帰依し、釈尊は過去仏で功德がないと云って無視しているが、日蓮は自分の教えとして板まんだら真中に南無釈迦牟尼仏と小さく明らかに書いてある。日蓮が帰依せよと教えているものを創価学会が過去仏だからやめろといって、ここに師の教えと弟子の主張と相反するものが出来ている。この正反對の教義が何故最も勝れ、最も正しいのかその理由を

説明せよと池田会長と小平教学部長に何十回となく回答を求めたが、只の一言の回答も出ず、学会員に対しては只『創価学会の批判に一喜一憂してはいけない』とそれを繰り返すのみなのである。

これは日蓮の南無釈迦牟尼仏の表向きの信念と、牧口、戸田が『仏与仏』の文字に仏でない日蓮をはめ込んで仏にデッチ上げたインチキ仏との喰い違いで、この説明は誰にもできない。創価学会では今頃こんなことを言い出されるとは思わなかったで、これに対する説明は用意してなかったのだ。

とに角、自宗の御本尊に基く質問を受けて答えられない位、その指導者として、又その宗教として恥かしいこと、あわれなことはないであろう。インチキ宗教の実体はこのようなものである。

九、浄土宗の私たちは幸福である

前述のように、でたためのデッチ上げの教義を押し付けられたりしない私達は実に幸福である。何の宣伝もしない平凡に思われる浄土教のその中に一枚起請文という筋金が一本書通っているからである。しかも宗祖以来、法

華経の如く一字を入れ替えたりする必要もない所に浄土教の勝れた正しさが存するのである。真理は永久に変えられるものではない。

その真理え到達する道案内書が一枚起請文なのである。その永久不変の真理の中に阿彌陀仏の無量の光明と寿命が存在し、私達は念仏によりそれに結ばれ常に苦悩のない安らかな生活が営まれているのである。

講義書二七頁上段に戸田が『これは脱獄囚すなわち牢を破って逃げた男を捕え、人の血を吸う鼠をみつけたらつぶすように、人を憎むわけではなくても、こういった邪宗は断じて潰してしまわなくてはならぬのであります』と如何にも愚烈な意見を述べているが、私達は創価学会を潰すという小さな考えでなく、インチキ宗教創価学会の濁流に知らずに引き込まれて溺れかかっている人々に、このデッチ上げの教義をよく理解させて一人宛でも引き上げて浄土教を導き入れてあげてはどうであらうか。

仏教の最高目標である自覚、覚他が自づから体験できるように思われる。

繪	連
話	続

みんなの法然さま

—七箇条制誠のこと—

高 橋 良 和

さしえ 小 林 健 造



七箇条の制誠というものは念仏を停止するという動きに對しての一つのいいわけをしたものであつて、これが出されなかつた場合においては、比叡山の僧兵たちが一挙に法然上人のもとに切り込んできたのではないかと思われるほどであつたが、この七箇条の制誠が出されたので比叡山の僧兵たちの動きは一時おさまつたのである。

ところでこの七箇条の制誠のことであるがなにもこのいましめはその当時の人々だけに通じることではないので、今日の時代の人々もよく噛みしめて、念仏の道を歩む人たちのおしえの鑑みとすべきであるといえるのである。

更にこれを最近の新宗教というのか、吾がおしえだけを正法と称し、他宗のことを邪教などと呼ぶあやしい、宗教に似て宗教にあらざるやややこしい学会といわれる団体などは、こ

の上人の制誠を心にとめてもらいたいと思うほど仏教のおしえに帰依する人々の本願を示しているのである。

その七箇条というは、

一、仏教のおしえが何ものであるかを知らずして、他のおしえをそしめることをやめるべきである。

一、自分が少しも勉強しないのに、念仏以外の他の人々に對して論をふきかけるようなことはやめるべきである。

一、念仏を信ずるおしえの以外の人々に對して、あなたの信じているおしえをやめさせたり、それにいや氣をささせるようなことをやめるべきこと。

一、念仏を信ずる人は、いましめや、つつしみはしなくてもよいと考へて、無軌道な行動をしてはいけないこと。

一、自分勝手におしえの解決をして、師匠（法然上人）のこ



と)の
おしえ
にそむ
いて自
分の説
を立て
て人々
を迷わ
しては
いけな
いこと
一、自分
自身何
も出来
ないく
せに、
みだり
におし
えを広
めよう
として

まちがった布教をしてはいけないこと。

一、仏のおしえでないまちがったおしえを説いて、これが仏教のほんとうのおしえであるというようなあやまちをやめること。

このようないわゆる念仏を信ずる人々の日常のいましめを書き記した上に法然上人の弟子である。信空以下八十八人の人々の名をつらねて天台宗主におくったのである。

これをみて天台宗主は、まずこれなら法然上人の念仏はそう方々広まることもないだろう、これだけ固い約束をしているのであるからまず大丈夫だろうと安心したのであるが、このことを考えてみると、正しい法が広まるのにはやはり、水が低きにつくほどすらすらと広まらなかったことかよくわかるのである。

正しいものであればあるほど、必ずといっていいほど邪魔ものが出てくるのは当然のことである。

この七箇条の制誡を提出した年は元元元年十一月七日のことであるが、然しこれだけではまだすまなかったのである。

この外に法然上人は、更に天台宗主に自宗の手形とでもいうべき、請書を提出して固く守ることを誓っているのであるから、如何に比叡山の僧兵がこの法然上人のおしえの普及することを邪魔にしたかがわかるのである。

それでこのことを心配したのが月輪殿、すなわち九条兼実公であって、この月輪殿からも天台宗主に手紙が届けられたのである。

もちろんその内容は、法然上人の念仏のおしえのすぐれていることを述べて、

この法然上は自分にとっては師範である。そして念仏の指導者である。日本のこの大先輩に対して、どうか罪をきせるのはやめてもらいたい。

もし法然上人を罪にするようなことがあれば、わたしが代ってその罪をうけてもよい、そして自分はどうしてもこの浄土のおしえを守りぬきたい。

よろしくおねがい申しあげる。

としたしめてあったのである。

御白河法皇が双えのさいころと、加茂川の水、それに僧兵はなんとしても自分のままにならないとおっしゃったくらい、いうことのきかなかったこの僧兵たちも、月輪殿からのこの手紙でやっと納得（なっとく）したのである。

然し比叡山の方はこれでやっと了解したが、まだ落ちつかないものがあつた。

それはこの比叡山の僧兵に対抗して、奈良にもこの僧兵たちがいたのである。

その中心は興福寺であって、一応比叡とのことは制誡と月輪殿の手紙でけりがついたようであつたが、興福寺の方は、それはあちらさんのこと、こちらにはこちらの都合があるというので、またまた長刀や、刀をさげて、法然上人に対する圧迫を加えようとしたのである。

一難去ってまた一難である。

然し幸か丁度このときに天皇から宣示というのが下りて、法然上人の門下のなかには、そのおしえを誤解してまちがった説をたてるものもあるが、法然上人のすすめる念仏はそういったものでないから、国民も安心するがよい、そうであるから罪を加えてはいけない。

というありがたい命令が出されたのである。

これで法然上人のおしえもやつの思いで一般大衆に布教することを許されたのである。

そのとき、法然上人はその門弟たちにも何の罪も加えられなかったことをよろこぶと共に、真に念仏のおしえが人々を導くものであるということを広く一般に知らしめると共に、他宗のさまたげとなるものでないということをはっきりさせるために、自分の弟子の聖覚法印（せいかくほういん）に筆をとらせて執筆させたのか名高い「登山状」という文章である。

夜明け前に見た夢で少なからず気をもみ、夢さめてホットしたり、強く自己反省をしたり致しました。その夢とはこうです。

最近、新しく買い求めたハンドバックを持って外出したところ、何だか沢山人の集ったところに一寸置いた隙に失ってしまい、どうしても見当らず其れから大騒ぎして探し廻るのですが……とうとう見つかりませんでした……でも、之れは夢の中の事で本当には其んな被害は無いと良いのだがなあ……と一縷の望みをフツ思いついた途端に目が醒めたのです。

夢の中では、あちこち飛び廻って身体的に疲れましたが、サテ目が醒めてからは精神的に！常日頃は日常生活の雑事に紛ざれているとは云え、仏弟子たるもの帰一するところはみ仏のはず。だのにたとえ？の中とはいえ一ト声のお念仏も申さず、唯、失ったもののみを捜し求めるあさはかな我が姿を冷静に客観的に想起して慄然となると共に悲しくなりました。おそまつな信仰を愧じ入りました。夢か、現実か、どちらが真実か？の議論は別として、寝てもさめても、お念仏を殆んど忘れていた事を、とても淋しく思いなさけなくなりました。新年に当り、今年こそは浄土宗徒らしく念々の中に生活して行きたいと希っております。

長谷川実禅

新刊紹介

真野 正順 著

B 六判 三五六頁
価七〇〇円 千七〇円

「日本人の信仰と生活」

△内 容▽

香を焚く・生活を強く美しく・先聖行ける道・

真野正順氏を偲びて

山陽新聞社編

重 障 児

—この子らに愛の手を—

学 習 研 究 社 刊
定 価 三 五 〇 円

希望者は共に本会へ

編集後記

▽きさらぎ十五日、仏陀は八十才の生涯を閉じて、涅槃に入りたまう。人間生活の悲しみも、喜びも苦しきものりこえて、まことの人生のあり方を体験し、お示し下された仏陀の大慈大悲のみ心を、静かに味いたいとおもう。

▽その意味で、久々、松濤誠廉先生の玉稿涅槃を紙面にかざることができたことは幸甚である。先生は長年九大で教鞭をとっておられたが停年で、東京にもどられ大正、立正等の大学で学究生活をおくっておられる。今後、時折り本誌に玉稿をかざっていただけるとおもふ。

▽鑽仰会の創立者、真野正順先生の「日本人の信仰と

生活」は仲々好評である。キリスト教より仏教の信仰に転向しい一女性は、「この本をもっと早く拜見していたら、廻り道をせずに、もっと早く心のやすらぎをおぼえたことでしょう」と一文を寄せてきた。

▽つづいて、この度、教育新潮社より、竹中先生の「日本人の仏教」が出版された。浄土教における人間像をもとめて、つづられたこの本は、行間にまで、著者のヒューマニティーがにじみでており、一読に価する。

▽なんとなく、もやもやしている宗門内外の空気があつて、年あらたまつて、少しでも新鮮なものを期待したいもの。その意味で、浄土宗新聞の刊行はよい。民衆不衣の教化から、民衆の

なかに、根をおろした、生活の中に念仏がつたえられ唱えられるための、かけはしの役目を果たすことを念じたい。

▽本会同人代表の佐藤密雄先生、三年の任期を無事果たされて、大正大学長の職をしりぞかれた。仲々ご苦労が多かつたようである。最近、じっくり書斎生活ができること、よろこんでおられた。

▽それに引きかえ、佐藤良智先生は、文学部長、浄土宗学監、その他一度に大役を背負つて、ご多忙の様子、しかし健康状態も良好、一層のご活躍が期待される。

▽今年も、どしどし、浄土誌ご注文を寄せていただき、みんなの雑誌に育てたいものである。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十二年一月二十五日 印刷
昭和四十二年二月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

発行所 法然上人鑽仰会
東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八二八七番

希望を与える力強さ

伝獅子吼菩薩像

—— 一木造 ——

唐招提寺蔵



仏像はたくさんの部分から集まってできた寄木造りよりも、一木で作られた仏像のほうが、はるかに力感に富んでいることをひとは知っている。それにしても、頭部から足先き、さらには連肉・蓮臺までも、一本の木で刻まれた見事な一本彫刻のこのみほとけは、じつにみずみずしい。頬が強く張り、あごが小さく、体は量感にみちみちており、両肩が張っているからだけではなからう。東大寺の優美な天平仏に対して、力強い唐招提寺様式の仏像が愛された理由は、脈々と胸うつ生命力にほかならない。その力強さは人間に勇気と希望を与えようとする。荒々しいばかりの姿が、完成された優

美な天平仏とはこと違い、未来には必ず完成されるであろう夢を、人びとに教えざとしてゐる。

ことに胴体の力感にはその夢がさらに溢れもしようし、その体にさらに色彩を加えようとも思わないであろう。衣紋のすばらしい曲線がいきいきとしている。お顔のなかで鼻が欠けているのも、私にとってはなつかしいと思うのもひが眼であらうか。欠けた部分から、完成された優雅なみほとけを思う創造力が生まれてくる。これこそ、まことのぼさつのありかたのような気がしてくる。

(石上 善応)

大 正 大 学

東京都豊島区西巢鴨4の530 電話(918)7311

昭和42年度学生募集

募集人員 200名・2,3年若干名 大学院修40名・博13名)

カンセリング研究生(10名名)

出願期日 第一次1月10日～2月26日

第二次3月2日～3月27日

試験日 第一次2月27・28日 第二次3月28・29日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏数学・梵文学・浄土学・天台学・真言学

文学部 文学科—国文学・米英文学

史学科—日本史学

哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学

社会学科—社会学・社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリング 研究生

男女寄宿舎あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ(〒100円封入)

新刊 大正大学教授 竹 中 信 常 著
文 博

日 本 人 と 仏 教

定 価 600円
〒 70円

日本人の宗教観を大きく高く展開させた法然上人の教えと
信仰を明示した本書は人間と念仏を復興させる巨大な灯で
ある

教 育 新 潮 社 発 行

希望者は本会へ申込み下さい